

普及活動検討会実施報告書

仙台農業改良普及センター
実施月日：令和 7 年 8 月 28 日
実施場所： JA 新宮城あさひな統括営農センターおよび現地
(単位：人)

1 検討内容

No	検 討 項 目
1 2	普及活動計画について プロジェクト課題について No.1 次代を担う生産者の育成による梨産地活性化 No.2 ねぎの次世代担い手育成による産地の強化 No.3 ほ場整備を契機とした営農体制の整備 No.4 水稻乾田直播栽技術の定着による大規模土地利用型経営体の 基盤強化

2 検討委員の構成

区 分	人数	区 分	人数
先進的な農業者		生 活 者	1
若手・女性農業者	2	学識経験者	
市 町 村	5	マスコミ	
農業関係団体	2	民間企業	1

3 委員の評価と普及センターとしての対応方向

検討項目	評価値 平均値	評価結果（コメント、評価表の要約）	普及センターとしての対応方向
普及計画 について	4.5	○現状の宮城県や仙台市が抱える農業生産現場における課題について丁寧にプロジェクト活動に落とし込まれて いると評価できる。今後、個々のプロジェクトも情報交 換や連携することにより、プロジェクト地域以外の課題 解決に応用できることが期待できる。 ○プロジェクト活動は、産地強化に係る取り組みが 2 件、 生産基盤の整備に伴う営農体制の考察、省力化に係る技 術の普及といった内容になっており、また、重点活動は、 地域農業の課題や取り組みがピックアップされており、 バランスの取れた計画となっている。 ○どのプロジェクトにおいても、関係機関・団体と密接 な関係を築き、地域農業の活性化に向けて、積極的に普 及活動を推進し順調に進捗していることが説明より確認 できた ○宮城県の農業が目指す姿を明確にして、その要因を分 解して整理するといったと感じる。 ○課題としては、農業者の確保があげられるが、普及セ ンターと各市町村が連携した取り組みが必要と思う。ま た、支援対象者が取得した生産技術等を、他者に波及さ せていくことが必要と考える。	○今後も各プロジェクトは地域の課題解決に向けて丁寧 に対応するとともに、プロジェクト間での情報交換を促進し、 成果やノウハウを他地域にも展開できるよう努めてまいり ます。 ○産地強化、生産基盤整備、省力化技術の普及など、重点 活動の内容を継続しつつ、スマート農業や環境配慮型技術 の導入など、次のステップへの展開も検討いたします。 ○順調な活動計画の進捗には、関係機関との密接な連携が あるので、今後も市町村、JA、関係機関などとの協働体制 をさらに強化し、地域農業の活性化を図ります。 ○「みやぎ食と農の県民条例基本計画」「県協同普及事業 実施方針」「仙台地域普及指導基本方針」に基づき、普及 指導計画を作成し、取り組んでいます。普及指導計画作成 に当たっては、地域課題の把握や将来の農業の方向性につ いて、各市町村、農業協同組合等関係機関と意見交換を行 い、整理して進めていきます。 ○担い手確保と技術の波及について、農業者の確保は県の 農政推進上の重要課題であるため、今後とも市町村と連携 した担い手育成支援を強化し、支援対象者が取得した技術 を地域内外に波及させるための仕組みづくり（例：研修会、 現地検討会、SNS 活用など）を進めてまいります。
プロジェクト課題 No.1 次代 を担う生産 者の育成に よる梨産地 活性化	4.3	○利府なしの協議会を軌道にのせるためのプロジェクト や人材育成の観点での内容があるとよい ○新規就農者がしっかりと事業継承し経営を続けていく ために必要な生産と担い手の仲間づくりに重点を置いて いることに評価できる。対象者の個々規模感、今後部会 の面積維持、高まる需要に答えられるかを次世代の生産 者が話し合える環境ができることを期待したい。 ○園主の高齢化の問題があり、若手を対象者とするこ とで高齢者の刺激になる取組みをしていることがとても評 価できる ○防除回数が減るなどの経費削減は継続できるポイント として大きい。猛暑の影響で作物の収穫時期が早まって いる状況での早生品種がどのような栽培結果になるのか 見極めてもらいたい ○ブランド化されている利府梨の生産が、今後も発展的 に継続されるよう、内外からの新しい担い手の受け入れ も積極的に取り組まれない。 ○活動評価の見える化として、成果を数値やグラフで表 現しては。また、次世代への広報として、SNS や動画 を使って「梨農業の魅力」を若者に発信、教育機関等と 連携する等の取り組みを提案する。研修を地域組織に任 せる等、行政支援から自立型へというふうに移行を促	○JA 仙台利府梨部会は生産者が主体的に活動してい ます。普及センターとしては、この活動を継続して支援す るとともに、若手生産者の勉強の場である Pear・カレッジ・ りふに対する視察研修や交流の場づくりや、地域おこし協 力隊等に対象とした他地域との交流や自らの気づきを与え られるような活動をしています。 ○今後も研修会や巡回活動等をとおした産地づくりを目指 して支援していきます。安定生産に向けた技術的支援とと もに、持続的な営農活動を確立するための経営的な課題解 決に向けた支援を展開し、高まる需要への期待に応えられ るような体制づくりを支援していきます。 ○園主の長年培った技術や思いを若手生産者が受け継ぎ、 お互いに刺激しあえるような交流の場を設けたいと考えて おります。 ○天敵ダニ製剤を活用することにより、猛暑下での過酷な 防除から少しでも解放されることを普及していければと考 えております。また、今後の有望な早生品種として、宮城 県より温暖な地域で育成された品種が良いのではないかと の予想から、経過を観察していきたいと思います。 ○担い手が安心して参入できるように情報提供や梨園の継 続について利府町と協力しながら進めたいと考えておりま す。 ○成果を数値やグラフで表現できるよう、心掛けてまいり たいと思います。また、SNS 等を使った広報については、 関係機関と相談しながら検討してまいります。生産者の技 術向上のための研修については、実際に利府町内の各地域 で自主的な研修がすでに行われており、地域の核となる生

		すかが課題	産者が中心となって、初心者やお手伝いに来てくださる方が気軽に参加できる体制となっているとのことです。
プロジェクト課題 No.2 ねぎの次世代担い手育成による産地の強化	4.0	○ネギ通信の発行、SNS を活用したネットワーク形成など参加者が後から振りかえられるようにしているところが評価できる。稲作中心でネギ栽培をしているなどの経営状況に応じて産地独自の栽培ローテーションや視察先の取組みで取り入れられる技術（栽培方法）を模索してほしい。 ○平均単収の目標が達成されているか知りたかった。 ○気象も加味した内容になっていた点が、カバーできる範囲が広く評価できた ○次世代を担う若手が増えるためにも、技術面の向上や高収益に繋がるよう、生産意識の向上を図っていただきたい。 ○今後、ベテラン生産者にも SNS へ参加してもらい、気軽にアドバイスもらえるような体制を作れるとなお良い。 ○暑さ対策は、栽培方法ではなかなか対処できないので、適切な品種の選定などを進めて欲しい。また、ドローン防除の普及も進めて欲しい。 ○技術だけでなく経営能力（販売戦略、コスト管理、労務管理）に関する研修等も強化すると持続性が高まるのでは。	○引き続き LINE グループ等を活用し、次世代担い手のネットワーク形成を支援していきながら、J A や部会と連携し、ベテラン生産者から気軽にアドバイスもらえるような体制づくりを図っていきます。 ○収量については年度末に向け取りまとめるとともに、若手生産者の情報交換会における振り返りの中で課題を整理し、品種や作型等も含め、各自の営農条件を踏まえた作業体系がとれるよう、支援していきます。 ○ドローンを所有する生産者はまだまだ少数ですが、気象データ等のアグリテックの活用に向けた情報収集と提供を打進めてまいります。 ○J A や部会と連携を図りながら販売戦略に取り組んでいくとともに、経営研修等への参加を呼びかけ経営能力の向上に向け支援していきます。
プロジェクト課題 No.3 ほ場整備を契機とした営農体制の整備	4.2	○対象者は今後の理想な営農モデルだと思う。栽培計画だけでなく、1 年先の資金繰りや中期計画、理念づくり等、支援の方向性は適格だと思う。対象者がここまで発展してきた要素を掘り下げて整理して、この経営体を目標として、10ha 前後で伸び悩む方の支援につなげてほしい ○今後、各地域で同じような事例が多くなると予想される内容の課題であり、地域住民に法人運営を理解してもらう取組みと評価できる。法人に経営理念や就業規則が設定されることで、栽培品目もその法人の特徴と合致するものを選定できると思う。今後の法人設立のロードマップに起こしてほしい。 ○対象者の農地は地区ごとに分散しており、また、中山間地域で獣害も懸念される。5 地区のそれぞれの状況を踏まえて団地化することで、栽培品種の固定化や地区同士のブロックローテーションを行い、機械移動の省力化や連作障害を回避しての収穫量向上につなげるのがいいのではないか ○農業体験などを通じて、教育・交流・観光の複合的効果も期待できるのではないか ○大きな課題なので、もう少し支援する期間が必要と感じる。	○対象法人は比較的若い担い手や従業員を有し、人材面で恵まれている一方で、法人の経営体制が整わないまま、農地整備による農地の集積が進んでいます。農地整備や法人運営は今後も続くため、プロジェクト課題終了後も普及センターとして継続的に支援するとともに、法人設立以降の営農体制の変遷や地域住民との関わり方について、成功点や失敗点等も含めて整理し、他の地域へ横展開できるよう努めてまいります。 ○栽培品目と農地利用に関して、今年度は比較的排水性の高い地区に大豆を集約して団地化することで、作業労力の軽減や収量向上に務めました。しかし、連作障害を回避するために今後ブロックローテーションを行っていく必要があります。そのためには、特に排水対策や獣害対策が障壁となります。収量や作業性の向上に向けて、栽培品目や農地の選定、排水対策技術の指導など、引き続き支援してまいります。 ○対象法人では、今年度から大和町地域おこし協力隊に対して技術指導を行っているほか、宮城大学と連携したさつまいもの加工などにも取り組んでいます。また、近隣には自然豊かなセツ森や、台ヶ森温泉も所在しており、観光面での可能性も秘めていると考えます。自社の発展と併せて、人材育成や地域振興にも貢献できるよう、支援してまいります。
プロジェクト課題 No.4 水稲乾田直播栽培技術の定着による大規模土地利用型経営体の基盤強化	4.5	○水稲乾田直播は 30 年前からある技術だが、今になってニーズに合致してきている。普及センターの技術支援の歴史と観点、レベルの高さを感じる取組だと思う。しかし、20ha 以上の方で乾田直播を導入している割合はいまだ低い。シンポジウムの開催等、さらなる拡大に向けた普及計画に期待する。 ○乾田直播栽培では収量がどれくらいになるか知りたい。 ○導入にはハードルが高い技術であるため、事例集の作成は今後の導入に際して判断材料になることが期待できる。今後、導入に適するほ場や技術習得にかかるコストも明確にしてほしい。	○今後作成する予定の事例集では、対象法人の作業体系のほか、除草剤使用例といった一般的な体系、圃場条件、各種コスト、必要な機械一覧、労務負担軽減や省力化の効果検証などの掲載も検討しております。乾田直播栽培の新規導入や面積拡大の参考となる資料として作成する予定です。 ○収量については、移植栽培と遜色ない収量（1 俵弱減～微増）が得られています。年度末の最終検討会の際に、今年度の収量も報告したいと考えております。 ○乾田直播栽培は、短時間で広い面積に取り組むことができるので、大規模経営体に親和性があると考えています。昨年に引き続き、研修会等開催し、若手や新規生産者、興味のある生産者等を参集し情報提供していきます。また、新

		○乾田直播が、現在の天候にあった栽培方法なのか検証する必要があると考えます。育苗に関しては省力化となる技術かもしれないが、作業は省力化ではなく時期の分散化であるため、栽培全体での省力化になっているのか検証が必要ではないか。 ○乾田直播栽培の年数を重ねるにつれ収量・品質も移植と同等程度まで向上しているように感じる。今後は導入コストと労務削減効果・収益増加効果の試算、雑草対策に要する薬剤費用など、費用面の比較の検証も必要と考える。 また、若手、新規就農者へも積極的に普及してはどうか。 ○直播栽培の新しい技術情報があれば、生産者へ共有していきたいので情報提供をお願いしたい。	技術や最新の知見も研修会等の機会を活用して周知するほか、仙台農業改良普及センターのホームページに掲載している「稲作情報基本編（直播栽培）」を追記し周知します。 ○気候変動について、昨今の高温で、移植栽培は育苗管理で失敗する事例が散見されますので、その点はリスクが低いと思われます。また一般には移植栽培より生育ステージが遅れるため（今年は1週間程度遅れて出穂の圃場が多い）、登熟期の気候のリスクをある程度分散できると考えています。しかし、昨年のような顕著な高温年では生育ステージ移植栽培に追いつく圃場があり、マイナスではないものの、乾田直播栽培だけで高温への対抗策とするのは心もとないと考えています。
その他		○検討会を通して、普及センターの働きに感銘を受けたと同時に、課題解決の難しさも感じた。一つ一つのプロジェクトは別でも繋がっている地域課題をどのように丁寧な解決していくかが重要と感じる ○今後も毎年の猛暑が予想され、栽培品目や品種を兼ねないと気候変動に対応できないのではと懸念している。現在の気候にあった新たな栽培品目や品種の検討について、今後の検討内容に追加してほしい。 ○支援対象者だけでなく、生産者同士の交流を活性化させることによって、他者の取り組み（新技術の導入など）を学び実践していくことで、農業者の所得向上、農業の発展につながると感じた。 ○消費者や市場ニーズといった需要側の動向を、普及活動へ反映させてはどうか。	○今後も、プロジェクト間の連携を強化し、課題の全体像を共有しながら、段階的かつ丁寧な解決を目指す体制づくりを進めてまいります。 ○県でも気候変動に適応した農業技術について、新たな品種や栽培技術の実証・普及を進めておりますが、普及センターとしても、様々な情報を活用し、地域に合った品目・品種の導入を支援してまいります。 ○支援対象者だけでなく、広く生産者同士の交流を促進することで、新技術の導入や経営改善のヒントが得られるため、現地検討会やSNSを活用した情報共有、地域内の勉強会などを通じて、交流の場づくりを支援してまいります。 ○普及活動にも市場動向や消費者ニーズの反映が必要であるため、販売現場や流通関係者との連携強化策を検討してまいります。

※：検討項目数に応じて欄を追加し記載する